

文章力向上のための継続的支援に 学生をどうつなげるか

—個別支援の利用を促す「日本語レベルテスト」の試み—

田 村 早 苗

文章力向上のための継続的支援に学生をどうつなげるか ——個別支援の利用を促す「日本語レベルテスト」の試み——

田村 早苗

目次

1. はじめに
 2. 文章指導の現状と問題点
 3. 「日本語レベルテスト」
 4. おわりに
- 付録

【要旨】

北星学園大学では文章力を育成する指導として、共通科目の「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」に加え、学習サポートセンターが提供する個別支援として「日本語ライティング」を実施している。しかし、文章力を継続的に向上させ、より多くの学生を「自立した書き手」に成長させるには不足点も多い。現状を受け、特に2年次以上の学生に個別支援の認知と利用を促すことを目的として、筆者は2018-2019年に学生向けイベント「日本語レベルテスト」を実施した。本稿ではその概要について説明する。

「日本語レベルテスト」では、限られた時間の中で文章能力へ意識を向けるため、誤りを含む文章について参加者が修正点を指摘する方式で実施した。時間は90分で、参加者は最後に「総まとめ」を提出し添削を受けた。参加者の反応はおおむね好意的であったが、個別支援の利用を促すという目標への貢献は満足なものとは言えなかった。反省点として、単調な展開であったこと、および、参加者が実際に直面するジャンルや内容の文章を扱っていなかったことがある。より効果的な方法を検討するとともに、個別支援以外の場で学習者が取り組める文章力向上のための教材を作成することが今後の課題である。

1. はじめに

大学教育において文章表現教育の重要性が注目されるようになって一定の期間が経過し、初年次教育を中心に日本語表現科目を設けることが広く行われるようになった。文部科学省(2020)によれば、「レポート・論文の書き方等の文章作法」を初年次教育として実施している大学は679大学(91.8%)にのぼっている。加えて、早稲田大学国際教養学部における「ライティング・センター」の設

置(2004年)以降、正規課程外で英語や日本語の文章の個別指導を実施する支援制度を設ける大学も増加している。

北星学園大学でも、文章表現科目として「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」を初年次に設置している。また2015年のラーニング・コモンズ設置をうけて「日本語ライティング」個別支援制度の設置を進め、同年秋より支援を実施してきた(設置の経緯と支援の実際については松浦ほか2018を参照)。これにより一斉教育と個別支援の両面で日本語文章能力を育てる体制

キーワード：文章表現, 個別支援, 自立した書き手

が整ったことになる。

しかし、文章力向上のための継続的支援という点では問題も残る。本稿では、在学期間を通じた支援として何が必要かという視点に立ち、個別指導への入口として2018-2019年の春と秋に筆者が実施した「日本語レベルテスト」という学習セミナーについて、内容やこれまでの実施状況について述べたうえで、現在の形態の課題と今後のあり方について検討する。

2. 文章指導の現状と問題点

第1節で述べた通り、本学には一斉教育と個別支援の両面で文章能力を支援する制度があるが、問題点もある。2.1節では一斉教育に関する問題、2.2節では個別支援に関連する問題について述べる。

2.1 初年次とその後の文章指導

第1に、一斉教育としての文章表現科目に関する、2年次以降への継続性の問題が挙げられる。「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」は、初年次配当の共通科目として設置されており、アカデミック・スキルとしての文章作成の指導を行っている。文章能力は維持・向上のために継続的な訓練を必要とする。初年次学生は「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」受講終了時点でアカデミック・ライティングの基本的知識は得ているものの、文章力の面点ではさらに訓練を要する学生も少なくない。

ブランクが生じてしまうと、専門科目の課題や卒業論文の時点で文章が書けない（あるいは書くことに対する心理的障壁が高い）という状況に陥ることが予想される。実際に、ゼミの担当教員等から「学生の文章力が低い」という相談を受けることも少なくない。「日本語ライティング」支援が問題解決を担えれば良いのだが、例えば卒業論文執筆段階などで文章力の問題に直面した場合、専門内容と文章能力の線引きが難しく、個別支援のカバ

ーすべき範囲を判断しにくくなってしまふ。できるだけ早い段階からの文章力の訓練や支援が必要である。

2.2 個別支援と「自立した書き手」問題

もう1つは、個別支援に関する問題点である。「日本語ライティング」支援は、佐渡島ほか(2013)の「自立した書き手を育てる」という考え方に倣い、文章の個々の問題点を教員が添削するよりも、話し合いの中で問題点について考え、ともに修正方法を検討することを目指している。これは、その場限りの問題解決ではなく、今後につながる書き手としての成長を促したいという理念によるものである。

しかし、このような目標に関しては悩ましい状況がある。ラーニング・コモンズでの個別支援は学生の自主的な申込を基本とするため、必要な学生に支援を届かせられない場合があるというのが1つの悩みである。この悩みの対処法として、「日本語表現」の授業を通じて個別支援が望ましい学生に利用を勧めることもある。しかし、目先の課題について支援担当者から修正方法を聞き出せばよいというという態度だと、書き手の成長につなげることは難しくなる。

このようなジレンマを解決するためには、文章能力に関する学生の意識を高めるとともに、日本語ライティング支援の認知度を向上させることで、個別支援利用へと繋げることが重要と考えられる。そのための1つの案として、2018-2019年度に学習サポートセンターの協力を得て「日本語レベルテスト」という学生向けイベントを実施した。次節ではこのイベントについて説明する。

3. 「日本語レベルテスト」

3.1 イベントの概要

本イベントは、文章能力向上の必要性を意識させつつ個別支援の利用を促す目的で計

画・実施した。イベントの計画・実施は学習サポートセンタースタッフの協力の下、著者が行った。

イベント内容の企画にあたっては、「自立した書き手」が持つ能力のうち、「文章の問題点に自ら気づき、修正することができる」という部分（佐渡島ほか2015）に注目し、イベント参加者に誤りを含む文章を添削してもらう形式をとった。内容のメリハリをつけて集中力を持続できるよう、4つのレベルに分けて時間を区切り、それぞれのレベルに5～10問前後の小問を設けた（付録1）。各レベルについて「参加者が自分で文章の添削や修正に取り組む（10分）→スクリーンで解答を提示しつつ解説（5分）」の流れで進め、4レベルを繰り返したのち、最後に「総まとめ」としていろいろな誤りを含むまとまった文章の添削を行なわせた（15分）。「総まとめ」の部分のみイベント終了時に回収し、採点して参加者に返却した。返却時には、採点結果の点数に応じて4つのレベル（ひよこ→孵化→たまご→白鳥）に分かれた「認定証」が学習サポートセンタースタッフから参加者に配布された。

3.2. 各レベルの内容

イベント参加者が添削する文章は、各レベルについて次のようなポイントを扱っている。扱うポイントや問題点の洗い出しに際しては、安部ほか（2010）および友松（2008）を参考にした。

レベル1：誤字脱字、誤表記、接続詞の誤り

例) 以前として与断を許さない状況が続いている。

レベル2：ねじれ文、助詞や呼応表現の誤り

例) 今年の本サークルの目標は、地区大会で代表の座を勝ち取り、全国大会に出場したい。

レベル3：曖昧な文、複雑すぎる文

例) 現代の感覚からすると、この対談では、落語などの伝統芸能の演目の中には差別的な表現が含まれているが上演すべきか否かを、演者と鑑賞者の立場から是非を話し合っている。

レベル4：表現の言い換え、重複回避

例) 成績を残している。

=成績を□□で

※下線部の言い換えになるように□内に1文字ずつ入れる

総まとめ：4つのレベルの内容全てに関連

レベル1～4は自己採点を行い、正答数で3段階に分けて自分の能力を意識できるようチェックマークを付けてもらった。付録1として配布資料の1例を掲載する。

3.3. これまでの実施状況

前述の形式で、2018年度および2019年度に2回ずつ、計4回実施している。学習サポートセンターから学生にイベント情報のメールを送付する、ラーニング・コモンズ内での掲示をするなどの告知を実施し、参加希望者を募った。実施日程は以下のとおりである。

- ・ 第1回：2018年4月27日
- ・ 第2回：2018年9月28日
- ・ 第3回：2019年4月26日
- ・ 第4回：2019年9月27日

実施時期は、各学期の「日本語ライティング」支援開始直前の週に設定している。場所はラーニング・コモンズ内の「プレゼンテーション&セミナーエリア」を利用した。参加者は各回5～15名程度であった。なお、2020年度にも開催予定であったが、新型コロナウイルス対応でラーニング・コモンズの利用制限が実施されたため、開催を中止している。

なお、個別支援紹介のためのイベントという性格、および各回の参加者数が少ないことから、「総まとめ」の採点結果について統計

処理などは行っていない。

3.4. 課題

これまで計4回の「日本語レベルテスト」イベントを実施し、加者の反応はおおむね好意的であるが、当初の目的である個別支援の利用につながった例は2件のみにとどまっている。文章力の意識と個別支援の利用への橋渡しという観点で、より魅力的な内容を検討する必要がある。

本企画の問題点を3点挙げる。1つには、内容が単調で一方的（テスト形式の添削→教員からの解説の繰り返し）になってしまっている点である。学生の関心を引くにはテスト形式も有効ではあるが、文章作成の実際のプロセスを意識できるかという点では検討の余地があるだろう。

第2に、添削対象となる文章が一般的な内容で、学生が触れる文章、書くことを求められる文章の実態を反映していないことが挙げられる。実際のニーズを反映することでより「自分のこと」として文章能力への意識を高められるのではないだろうか。

この点については、全学生向け企画の限界という面もある。実際に書かなければいけない文章は学生の専攻や学年によって異なる。個別支援の有用性を具体的にイメージできるように、特別な目的・内容・スタイルの文章例を扱うことも検討したい。ただ、この場合は現在のような実施形態で行うのが果たして適切かという疑問が生じる。テスト形式ではなく、ワークショップ形式で「公開文章クリニック」を行うのも一案である。

第3の問題として、細かい点ではあるが、「日本語レベルテスト」というイベント名称が誤解を招いた点がある。具体的には、留学生向けがプレースメントテストと間違えて参加するという混乱があったため、内容の検討と合わせてより適切な名称を再検討する。

4. おわりに

本稿では「日本語ライティング」個別支援への橋渡しとしての学生向けイベントの実施報告を行った。目指す目標は、一斉教育によるライティング授業が終了した後の2年次以降において、文章力の維持・向上のために個別支援を活用してもらおう、というものであった。個別支援の担当者がイベントを実施することで、支援申込のハードルを下げることもこのイベントの目論見であった。これまで4回にわたって本企画を開催したが、その内容については再検討を要することを論じた。

最後に、文章力向上支援のための体制について今後の展望を述べる。本稿で紹介した「日本語レベルテスト」のようなイベントは、文章力に関する問題意識を掘り起こし、必要性を意識させるきっかけにはなるが、文章力を直接的に向上させるものではない。いっぽう、個別支援は特定の目標のもとで書かれた文章（ある授業のレポート、ある申請に使う志望動機書など）に対して行う単発の指導になりがちである。

この間を補うものとして、文章力について問題意識をもった学生が継続的に取り組めるような文章作成の教材を提供して、「自立した書き手」としての能力を磨けるような環境を作ることが必要である。国語の基礎力（漢字、語義、文法）や読解力についての自習用教材としては、北星学園大学には既にMoodle上で利用可能な「日本語」学習コースが存在している。しかし、文章を書く力に関して学生が手軽に利用できる教材は今のところ準備されていない。「日本語レベルテスト」用に作成した問題等も活用しつつ、今後はこのような教材の作成も進めてゆきたい。

〔謝辞〕

個別支援・イベントの実施について学習サポートセンターの永井暁行氏、米谷さくら氏、小林珠江氏、佐藤雪恵氏、中平詩織氏から多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします。なお、本研究は2019年度北星学園大学特定研究費（共同研究）「初年次教育における教育プログラム改善と学習成果の可視化を目指した評価テストの活用」（研究代表者：金子大輔）より助成を受けています。

〔参考文献〕

- 安部朋世, 福嶋健伸, 橋本修 (編著) (2010) 『大学生のための日本語表現トレーニング ドリル編』東京：三省堂.
- 佐渡島沙織, 太田裕子 (編) (2013) 『文章チュータリングの理念と実践：早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』東京：ひつじ書房.
- 佐渡島紗織, 坂本麻裕子, 大野真澄 (編著) (2015) 『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド：大学生・大学院生のための自己点検法 29』東京：大修館書店.
- 友松悦子 (2008) 『小論文への12のステップ—中級日本語学習者対象』東京：スリーエーネットワーク.
- 松浦年男, 田村早苗, 石垣佳奈子 (2018) 「北星学園大学における日本語ライティング個別支援の試み」『北星学園大学文学部北星論集』56(1):1-13.
- 文部科学省 (2020) 「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について」
https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf

付録 1

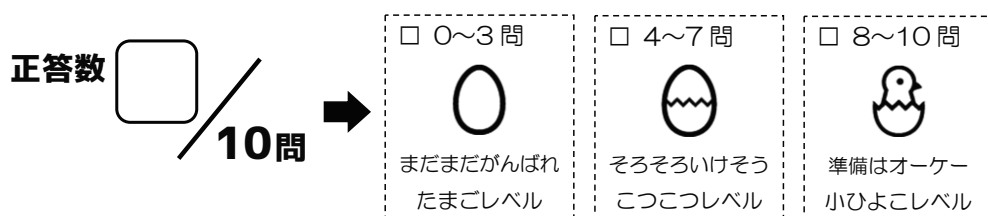
日本語レベルテスト (2018/09/28) @北星学園大学ラーニングcommons

p.1

LEVEL 1 まずは肩慣らし！ (10分)

- ★ 修正すべき表現は線で消し、下に修正後の表現を書きましょう。(例 専門科目)
- ★ 不要な表現は線で消しましょう。(例 本をが買った) 専門
- ★ 表現を書き足すときは、右の例のように足してください。 例： 郵便局切手を買った
- ★ 修正すべき箇所が複数ある場合もあります。 　　　　　　で

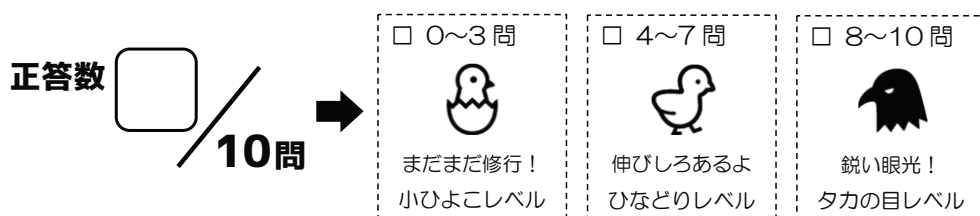
- ① このコースは、受講者が体型的に学べるように様々な配慮がされている。
- ② 学生 5 人に対して 1 人づつ、前任のアドバイザーがつく制度を採用してる。
- ③ 各講義後に 15 分の討議時間を設けており、思考力・発信力も延ばすことができる。
- ④ 欠席した際にはビデオを視調して補習を受けるだけでなく、アドバイザーとの議論も通うじて内容理解を補助する。
- ⑤ このコースの質が高いことは人目で分かる。というのも、受講料が高いのがネックだ。
- ⑥ 山本選手はこのところ 10 戦 9 勝 1 引き分けという好成績を残している。つまり、対戦相手は世界の強豪選手ばかりである。
- ⑦ インドでは古代から数学の発達が目覚ましかった。それでは、アラビア数学にも影響を与えた。
- ⑧ 起源前 3000 年以降のインダス文明の遺跡からは、10 進方を使用していたことを示めす道具が出土している。
- ⑨ 岐阜県・富山県に見られる「合掌造り」という急角度の屋根の建物は、雪下ろしの労力の軽減を考慮したものと考えられます。なぜなら、大きな屋根裏は蚕の飼育にも活用されました。
- ⑩ この地域の生活用式は近年注目を集めており、無形文化遺産の候補にも揚げられています。



LEVEL 2 文をきちんと組み立てる (10分)

- ★ 修正すべき表現は線で消し、下に修正後の表現を書きましょう。(例 専門科目)
- ★ 不要な表現は線で消しましょう。(例 本をが買った) 専門
- ★ 表現を書き足すときは、右の例のように足してください。例：郵便局切手を買った
- ★ 修正すべき箇所が複数ある場合もあります。で

- ① 共同スペースを利用マナーが悪く、利用者から苦情が寄せられている。
- ② ルールを厳密化にすることは一定の効果あるかもしれないが、自主性の尊重するというこの施設の目標にはそぐわない。
- ③ 重要なのは、利用者同士が互いに話し合い、自主的に改善に取り組むことが大切である。
- ④ 施設運営者側の目標は、利用者に話し合いの場が提供し、当事者意識を持たせる。
- ⑤ 2016年に実施された総務省家計調査には、豆腐の消費量が最も多いのは青森県、最も少ないのは北海道という調査です。
- ⑥ 特に、北海道の豆腐を消費量が低さは顕著で、偏差値にすると 23.4 で留まる。
- ⑦ 大学生の対象にした Web アンケートにもとづく売れ行きを予測を立てました。
- ⑧ この湖に生息する固有の魚類は、まだ繁殖地が明らかになっていない魚類が多い。
- ⑨ 「ラクレット」というのは、チーズの断面を熱して柔らかくし、ゆでたジャガイモにつけて食べる。
- ⑩ 当テーマパークでは混雑の対策するために、イベント開催場所の分散と入場者数を制限していただく予定である。



LEVEL 3 分かりやすさを意識しよう (10分)

タイプ1: ①~②は、それぞれA・Bの2通りに解釈することができるあいまいな文です。

★ 下線部分を解釈Aにしか読めない表現に書き換えて、解答欄に記入しましょう。

① 3人以上キャンセルしなければ、本講座は開講されます。

★ 解釈A: 受講予定者が10人として… 3人がキャンセル → 開講なし

★ 解釈B: 10人として… 4人キャンセル → 開講する / 8人キャンセル→開講なし

解答 _____

② 札幌市在住の20代社員と若手起業家たちの交流イベントを企画した。

★ 解釈A: 社員=札幌在住 / 起業家=札幌外在住もいる

★ 解釈B: 社員&起業家=どちらも札幌在住

解答 _____

タイプ2: ③~④の下線部分は複雑で分かりにくい文です。

★ 語順を入れ替えたり表現を修正したりして、分かりやすい文に書き換えましょう。

★ 必要であれば、文を2つ以上に分けてもかまいません。




③ 多くの一般市民が専門家などによる災害時の備えを日常生活に組み込むべきだという啓発活動が広まった結果日頃の対策法を理解してはいるが、実践にはなかなかつなげていない。その対策として、地域のイベントを利用して災害対策をする取り組みが注目されている。

解答 _____

④ 機器を独占的に販売していたA社が取引先に対して不正に要求していたサービス労働を記事にしたある記者を訴えた企業側には多くの批判が集まった。

解答 _____

正答数 / 4問 →

<input type="checkbox"/> 0問  まだまだ修行! 小ひよこレベル	<input type="checkbox"/> 1~2問  伸びしろあるよ ひなどりレベル	<input type="checkbox"/> 3~4問  やさしく導く 親ガモレベル
--	--	--

LEVEL 4 表現を磨く！ (10分)

タイプ1：以下の文の下線部は、言い換えられる表現です。

★ 下線部を別の表現に変えましょう。解答欄の□に1文字ずつ書き、字数の合う表現にします。

例：これが私の a. モットー である。 a.

座	右
---	---

 の

銘

① a. アートプロジェクトの b. ネガティブポイントとしては、地域住民の暮らしの侵害があげられる。

a.

--	--

 b.

--	--

② 俳優たちの a. パーソナリティを生かした b. 役の割り振りとコミカルな演出が、この映画の c. 注目ポイントである。

a.

--	--

 b.

--	--

 c.

--	--

③ a. 口げんかが b. 激化した結果、暴力事件が発生した c. 経緯を警察に証言した。

a.

--	--

 b.

--	--	--	--	--	--

 した c.

--	--	--	--

タイプ2：以下の文章には、同じ表現の繰り返しが含まれています。

★ 1文目の二重下線部と同じ表現にならないように、一重下線部 a, b を書き換えましょう。

★ 書き換えた部分どうしても、同じ表現にならないようにしてください。

④ 出版業界は現在転機に立たされていると 考えられる。インターネット等で容易に様々な情報が手に入る現状では、書籍や雑誌に日常触れる機会のほとんどない人も a. いると考えられる。その結果、出版業界が利益を得て事業を続けることは b. 困難になっていると考えられる。

※「考える」「思う」という動詞は使わずに書き換えること

a の書き換え _____

b の書き換え _____

⑤ 慎重な性格というのは、良い結果をもたらすこともあるが、悪い結果を招くこともある。私の経験を述べると、慎重な性格が a. 悪い結果を招いて、チャンスを逃すことが往々にしてあった。時には大胆な決断をすることも必要である。

※「悪」「結果」という語をどちらも使わずに書き換えること

a の書き換え _____

正答数

--

11問



0~3問



大志を抱け！
ひなどりレベル

4~7問



大きくなったね
あひる？レベル

8~11問



すいすい優雅
白鳥レベル

総まとめ 文章添削をしてみよう (15分)

- ★ 修正すべき表現を線で消し、下に修正後の表現を書きましょう。(例 専門科目
専門)
- ★ 下線部は、[]内の字数に合う別の表現に書き換えて下に書きましょう。(例 約 [3字] 4か月
およそ)

「地方創生」という言葉が市民圏を得て、「地域」の魅力を発進する取り組みが進められている。その中で注目を集めてきたものの1つに、地域での芸術祭・音楽祭などのアート・イベントである。もっとも、2010年から瀬戸内海の島々を会場として開催の瀬戸内国際芸術祭が代表的である。

芸術祭の1つのメリット [2字]は、日常の生活空間に作品の配置することで、一般の人にもツーリズム [2字]感覚でアートを楽しんでもらえる。さらに、美術館という場を離れることで、作品に対する見方を揺さぶることもできるのである。また、芸術作品をきっかけに、風景や土地、建造物の魅力を再発見させる効果もあるのである。たとえば、芸術家を外部から招待して [3字]作品を制作してもらおう試みや、廃校や空き家を活用する取り組みも行われているのである。

でも、案易に芸術祭の実施には問題も多い。その1つは、来場者数ばかりが目され、芸術を経済の手段として扱われてしまう点である。数字にこだわりすぎると、地域の特性を生かす、若手を育てる [4字]といった側面が軽視されかねる。

